北海道ユキワリソウ雑録（4）

豊国秀夫以後

昭和50年（1975年）、誠文堂新光社から発行されている「ガーデンライフ」の14巻４号に京都大学の堀田満助教授と山口聰氏の共著で「日本産のサクラソウ属」という論文が掲載された。

「属全体としては、第三紀の温暖な地域で分化し、氷河期の影響を受けなかった地域に残された氷河前期の遺存種群と、氷河期の寒冷な条件に適応して、現在の第四紀の暖かい気候条件下では、高山帯にしか生活できなくなっている氷河期の遺存種とに大別できる。日本にはこれら二通りの遺存種群が残されているのも、日本列島が南北に細長い上に、地形が複雑で、いろいろな生育条件を満たす環境がモザイク状に点在していることに起因しているようである。

したがって日本での分布を見ると、地方ごとに隔離されている場合が多く、地方型として認められる程度の変異が蓄積されていることもあり、分類学的取り扱いのうえで、種々の混乱が起きている。しかし、隔離分布の原因とか、地理的変異の把握とか、種分化の過程の追跡とか、系統進化学上、大変興味深いグループでもある。」

次いで「種類と分布」を詳しく解説している。ユキワリソウ節 Sect. Aleuritia の北海道に分布するものとしては、

P. modesta　ユキワリソウ、染色体数は体細胞で18本
　var. fauriae　ユキワリコザクラ（品種サマニユキワリを含む）
　var. matsumurae　レブンコザクラ
P. sorachiana　ソラチコザクラ、染色体数は体細胞で18本
P. yuparensis　ユウバリコザクラ、染色体数は体細胞で36本

「種々の点から、前述のソラチコザクラに最も近縁で、同一の祖先型から分化して来たものと思われる。」

昭和52年（1977年）、誠文堂新光社から『野生のサクラソウ』という本が、ガーデンライフと東京山草会の共編という形で出版された。サクラソウ属各種の栽培熱の盛り上がりを背景にして、それぞれの種毎、地域ごとの栽培育種方法について多数の執筆者によって書かれた本であるが、北海道のユキワリソウ類に関係する文章もたくさん載っている。少しだけ列挙すると、井上健「日本のサクラソウの分布」、井上健「日本のサクラソウの種類」、高橋幹男「自生地に学ぶユキワリソウの仲間」、大垣晃一「サクラソウの育種」、中田守「北海道地方におけるサクラソウの仲間とその作りかた」、大垣晃一「サクラソウの仲間 文化史」、井上健「日本のサクラソウの研究史」、井上健「日本のサクラソウの分布」。井上健氏は当時東大の研究生ではなかったかと思われる。

井上健「日本のサクラソウの種類」での学名の扱いは以下のようになっている。

Primura modesta Bisset et Moore　ユキワリソウ

var. fauriei (Franch.) Takeda　ユキワリコザクラ
var. fauriei f. samanimontana (Tatew.)　サマニユキワリ
var. matsumurae (Petitm.) Takeda　レブンコザクラ
Primula sorachiana Miyabe et Tatewaki　ソラチコザクラ
Primula yuparensis Takeda　ユウバリコザクラ

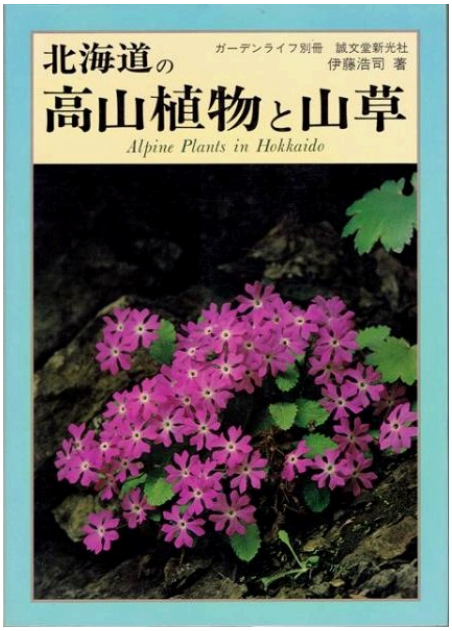
昭和53年（1978年）、旭川大学の豊国秀夫教授は奥様の豊国やなぎさんと共に「旭川大学紀要 第4号」に「A Preliminary Report on the Flora of the Central Mountain District, Hokkaido, Japan」を発表した。
その中に次のようなことが書かれている。（英文を意訳）
? P. farinosa L.　エゾユキワリソウ（新和名）
「この印象的なサクラソウは土田忠男氏によって大雪山系から発見された。この植物はさらなる調査が必要である。」

同じ年、北海道山草会の土田忠男さんはみねはな会の「みねはな」25号に「北海道に於けるユキワリソウ節の地理的異変について」を発表した。北海道のユキワリソウ節に属する植物を16地域から集めて栽培し、その葉形の変異を実寸のコピーを示し10頁にわたって解説した労作。シャリコザクラやユウバリコザクラの葉も載せられている。

昭和56年（1981年）、北海道大学の伊藤浩司教授が誠文堂新光社から『北海道の高山植物と山草』を出版した。B5サイズで写真を大きく使い、学名と解説、撮影地と日付が載せられていた。巻末には、詳しい北海道の植物についての解説と、分類のむずかしい植物の見分け方などが付随している。写真は新進の植物写真家梅沢俊氏が担当した。学名の扱いは以下のようになっている。
Primura modesta　ユキワリソウ
var. fauriae　ユキワリコザクラ
var. samanimontana　サマニユキワリ
var. matsumurae　レブンコザクラ
Primula sorachiana　ソラチコザクラ
Primula yuparensis　ユウパリコザクラ
「分類のむずかしい植物の見分け方」にはサクラソウ類も取りあげられ、次のように書かれている。「ユキワリソウの分類はこんにちでもいろいろ問題があって学名も一定しない現状にある。ユキワリソウをPrimula modestaとして独立種とする考え方と、Primula farinosaの亜種あるいは変種とする考え方とがある。北海道に自生するユキワリソウに近縁のサクラソウには後に述べるように、ユキワリコザクラやレブンコザクラがある。さらにまた形状の似ているユウパリコザクラやソラチコザクラを含めて形質の比較を行ってみると、ユキワリソウやユキワリコザクラでは葉の下面の粉状物は明らかに黄色で、しかも多量につく。また苞の基部は胞状に膨大しないし、萼の基部の胞化も

少なくて、萼の形は鐘型～壺型である点で、残りのサクラソウと異なる。レブンコザクラをはじめ、ユウパリコザクラやソラチコザクラでは苞や萼の基部は胞状に膨れており、葉下面の粉状物は硫黄色から白色へ、またその量も概して少ないし、ユウパリコザクラではときに辛うじて認めるにすぎなくなる。したがって広い意味では、形態的な面から、ユキワリコザクラとユキワリソウの１群と、レブンコザクラ、ユウパリコザクラ、ソラチコザクラの１群に２大別され、後者はむしろP. farinosaの中に含まれる可能性がある。（中略）

　北海道のユキワリソウで、記載に完全に一致するような個体はむしろ少ない。多かれ少なかれ、葉身基部の形にしてもユキワリコザクラに近づいて来、またときにレブンコザクラの日陰徒長型と思わせるものがあり、確実な産地を決めるのはなかなかむずかしい。」



　私が、花の咲く植物に目覚めたのはこの本によってであって、あちこちに赤線がたくさん引いてある。表紙のソラチコザクラの写真は穴の開くほど眺め、本はもうぼろぼろになってしまった。

　そうしているうちに、こんどはその年の秋遅く、平凡社から全編カラーの生態写真による『日本の野生植物』全三巻の III 巻目が発売になった。翌年の３月には全巻が揃った。しかし一冊一万数千円するこの図鑑は安月給の私にはとうてい買えるものではなく、書店でただ指をくわえて眺めるだけであった。

　企画から10年の歳月をかけて、植物写真家が手分けして全国の植物を網羅的に写真に撮り、佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫の五氏が編者となり、17名の専門家が執筆者となって発行された図鑑であった。北海道の植物の撮影は主に梅沢俊氏が担当した。遙かのちのこと私がこの図鑑を手元に持てるようになった時、ためしに大きな北海道地図を九枚用意して、年別に片っ端から梅沢俊さんの足跡を地図に書き込んでいった。そしてその日付け順に線で結んでみて、一つの矛盾もなくその線が結ばれて、この図鑑の記述の正確さと、梅沢さんのご苦労を思ったことであった。

サクラソウ科は最初に出た III 巻に掲載されており、科の執筆者は前東京大学教授の山崎敬博士。

Primura modesta Bisset et Moore　ユキワリソウ
　var. fauriei (French.) Takeda　ユキワリコザクラ
　var. matsumurae (Petitm.) Takeda　レブンコザクラ
Primula sorachiana Miyabe et Tatew.　ソラチコザクラ
Primula yuparensis Takeda　ユウバリコザクラ
サマニユキワリは載せられていない。

昭和57年（1982年）、武田久吉博士の『原色日本高山植物図鑑』正・続二巻を出版している保育社から新たな高山植物図鑑が出版された。信州大学教授の清水健美博士による『原色新日本高山植物図鑑』（I）と（II）。多数の写真家や研究者から寄せられたという生態写真がまことに素晴らしい。解説文は一から全て著者が新たに書き下ろしたのではと思われるほど、他の図鑑類と異なっている。そしてほとんどの植物に、基準標本産地及び染色体数、生活形、植物地理要素区分が書き入れられている点がユニークである。

Primula modesta Biss. et Moore　ユキワリソウ
　var. fauriae (French.) Takeda　ユキワリコザクラ
　var. matsumurae (Petitm.) Takeda　レブンコザクラ
Primula yuparensis Takeda　ユウバリコザクラ（ユウパリコザクラ）

サマニユキワリはユキワリコザクラのシノニムとされ、ソラチコザクラは収録されていない。ユウバリコザクラについては、「ユキワリソウに比べ、葉裏に黄粉を欠き、苞の基部がふくれ、花柄は短く、花は大きくて少ない。ユーラシア大陸に広く分布する P. farinosa var. denudata C. Koch に最も近いが、これは花が小さく葉裏に全く粉状物がない。」と書かれ、また巻末には葉裏の電子顕微鏡写真が載せられている。

同じ1982年、至文堂の『日本植物誌 顕花編』が新しくなり『新日本植物誌 顕花編』となった。著者の大井次三郎博士はすでに亡くなられて、北川政夫博士が改訂にあたられた。

ユキワリソウ類については、解説文の内容はほぼ変わりがないが、それまでの各版ではソラチコザクラの項に、「北海道（石狩：金山）にはえ前種の低地にはえた一型とも思われる。」（前種とはユウバリコザクラ）と書かれていたが、この版からは「北海道（石狩、日高、胆振の各支庁）にはえ、前種に近縁であるが、葉の下面に白粉をつけることで区別される。」（前種とはユキワリソウ）と書かれた。

北海道大学の伊藤浩司教授はたくぎん総合研究所の日野間彰氏と共編で『環境調査・アセスメントのための北海道高等植物目録』I から IV を1985年から1994年にかけてたくぎん総合研究所から出版した。

この目録は各種資料において北海道に産すると報告されている全ての植物について学名・和名及び分布を取りまとめたもの。これらを全てデータベース化することによって、異なる学名・和名の相互変換や分布情報の可視化など、環境アセスメントなどでの有効利用を目的として10年以上の歳月をかけて作られた。

1987年に出版された『環境調査・アセスメントのための北海道高等植物目録 IV 合弁花類』にサクラソウ科が収録されている。

Primula farinosa Linnaeus subsp. modesta (Bisset et Moore) Pax, ap. Engler ユキワリソウ

subsp. fauriae (Frenchet) Murata var. fauriae　ユキワリコザクラ

subsp. fauriae (Frenchet) Murata var. samanimontana Tatewaki ex Sugimoto サマニユキワリ

subsp. farinosa var. xanthophylla Trautvetter et Meyer　レブンコザクラ

subsp. yuparensis (Takeda) Kitamura　ユウバリコザクラ

Primula sorachiana Miyabe et Tatewaki　ソラチコザクラ

学名は資料によって異なる場合は基本的に北村四郎他『原色日本植物図鑑 草本編（上）』保育社（1957年）に依拠しており、省略なしで書かれている。（白花品などの品種は煩雑になるので除いた。）

各資料に出現する異なる学名・和名が資料名とともに列挙されており、ユキワリコザクラの異学名は11もある。伊藤教授は編者序で「分類学の研究というのは或る意味でこのような名前の異同を追求している科学なのであって、（中略）植物名の違いは一面研究者の主張の反映であり、分類学の発展に応じて変動するのもやむをえないことであろう。」と述べておられる。

ユキワリソウ類の学名がどのあたりに落ち着こうとしているのか、さらに素人ウォッチングを続けてみる。

昭和63年（1988年）、昭和最後の年、通称ドカベン図鑑とも揶揄される山渓カラー名鑑の一冊として、『日本の高山植物』が山と渓谷社から出版された。著者は信州大学教授の豊国秀夫博士。各頁に生態写真を大きく使い、分厚く重たく、書斎で眺めて楽しむにはふさわしい立派な本である。北海道の植物写真は主に梅沢俊氏が担当している。

Primula modesta　ユキワリソウ

var. fauriae　ユキワリコザクラ

var. matsumurae　レブンコザクラ

var. samanimontana　サマニユキワリ

Primula yuparensis　ユウパリコザクラ

Primula sorachiana　ソラチコザクラ

豊国秀夫博士はほぼ一貫してPrimula modesta４変種＋２独立種説を採っておられる。なおユウパリコザクラの写真の隣に「ユウパリコザクラとセイヨウユキワリソウ」と題したコラムも添えられている。「ユウパリコザクラは夕張岳の蛇紋岩崩壊地にしか見ら

れない非常に珍しい植物。葉の裏面に粉状物があることでユキワリソウに近縁だが、形態的にもっと近縁なのはセイヨウユキワリソウP. farinosaで、とくにそのユーラシア系変種var. denudataに近い。しかし、このvar. denudataにはユウパリコザクラのような葉の裏面の白い粉状物はない。このことは祖先は同じでも、それぞれ独自の分化を起こしたことを示している。つまりユウパリコザクラは夕張岳の蛇紋岩地ですこしずつ変化していったのである。このためユウパリコザクラをセイヨウユキワリソウの亜種とする見解もある。」

ソラチコザクラの写真は梅沢俊氏の花の大写しと木原浩氏の岩壁の群落写真の2枚が載っている。ソラチコザクラは他のユキワリソウ類に比して小花梗が長いといわれているが、木原氏の写真にはそれがとても良く出ている。

残念ながら豊国秀夫博士はこの図鑑上梓の４年後六十歳の若さで亡くなられた。

この雑録もようやく現在に近づいてきて、次は講談社の『Flora of Japan』。私があれこれ説明するより講談社のサイトから引用した方が手っ取り早い。「5,500種にのぼる日本の野生植物（シダ植物および種子植物）について、分類学的情報を英文書として編纂。大井次三郎『日本植物誌』（1953年刊、英訳版は1965年刊）以来の集大成で、（中略）植物分類群の階級に応じて、科ごとに属の検索表、属ごとに種の検索表、種ごとに亜種・変種の検索表を完備。種の記載においては、異名、和名、染色体数、所在情報、図版情報を記述。」

1993年にVol. IIIa が出版されたのを皮切りに全８巻の予定で現在までに７巻が出版されているがまだ完結を見ていない。

平成5年（1993年）に出版されたVol. IIIa（岩槻邦男／山崎敬／D.E.Boufford／大場秀章・編）にサクラソウ科が収録されており、執筆者は山崎敬博士。

Primula modesta Bisset et Moore　ユキワリソウ

var. fauriei (Fr.) Takeda　ユキワリコザクラ

var. samanimontana (Tatewaki) Nakai　サマニユキワリ

var. matsumurae (Petitm.) Takeda　レブンコザクラ

Primula sorachiana Miyabe et Tatewaki　ソラチコザクラ
Primula yuparensis Takeda　ユウパリコザクラ

同じ平成5年（1993年）、信州大学の豊国秀夫教授の元で研究生であった原信彦さんが旭川市の北海道山草趣味の会の会報「趣味の山草」27号に「日本産サクラソウ属ユキワリソウ節植物の分類学的再検討」という論文を発表された。29頁に及ぶ本格的な論文で、「はじめに」で次のように書かれている。
「本研究では、生育地での集団解析を中心にして行い、それにさく葉標本の観察を加えて集団変異を比較、把握し、以下にあげる問題点に着目して、日本産ユキワリソウ節植物の分類学的再検討を行いました。
一、二倍体の分類群の中でソラチコザクラは独立種として認められるか。
二、北海道で従來ユキワリソウとされてきた植物は、本州におけるユキワリソウと同一分類群と見なし得るか。
三、サマニユキワリは超塩基性のカンラン岩土壌という特異的な環境のアポイ岳にのみ生育しているがこれを分類群として認識出来るか。
四、四倍体の二種、ユウバリコザクラとヒメコザクラは単系統のものであるか。」
次に「材料と方法」では「葉形、さく果長、宿存萼長、花梗長、小花梗長、花梗の基部直径、苞の基部の膨らみの程度、葉縁の鋸歯」の形質に着目して合計14集団について集団サンプリングを行ったという。
最後の「考察」において、以下のことが述べられている。
一、二倍体植物の分類学的再検討
a、ソラチコザクラは独立種として扱うことが妥当。
b、「北海道のユキワリソウ」は本州のユキワリソウよりもレブンコザクラに似ており、分類群としてレブンコザクラに合一する方が妥当。
c、サマニユキワリはユキワリソウ、ユキワリコザクラ、レブンコザクラと同位の分類群として扱うのが妥当。
二、日本産ユキワリソウ節四倍体植物の類縁関係
このテーマについては、花の二型性や花粉の形態などについて詳しい解説がなされているが、「二つの四倍体種が単一起源であるか別の起源を持つのかについては、さらに詳しい研究が必要です。」と結論されている。

北大植物園の刊行物の一つに「Miyabea」がある。不定期刊行の英文誌で、1991年から1999年までに４号が発刊されただけであるが、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園のサイトからダウンロードして読むことができる。
平成6年（1994年）発行の２号に北海道大学の高橋英樹教授と植物園技官の津久井孝博氏が共著で「Genus Primula L. in Hokkaido, northern Japan」を出された。
北海道に自生するサクラソウ属９種のモノグラフで、本文が12頁、巻末には９頁の美しい植物画も添えられている。

Primula modesta Bisset et Moore　ユキワリソウ（道内自生種には含まれない）
var. fauriei (Fr.) Takeda　ユキワリコザクラ
var. samanimontana (Tatewaki) Nakai　サマニユキワリ
var. matsumurae (Petitm.) Takeda　レブンコザクラ
Primula sorachiana Miyabe et Tatewaki　ソラチコザクラ
Primula yuparensis Takeda　ユウバリコザクラ、ユウパリコザクラ

平成9年（1997年）、利尻町立博物館の研究紀要「利尻研究」16号に渡辺幹男・佐藤雅彦・芹沢俊介の三氏による「利尻・礼文島産のレブンコザクラの遺伝的特性」という論文が発表された。両島に生育するレブンコザクラの集団間の遺伝的同一度と遺伝的距離を算出し考察した論文。

平成14年（2002年）、北方山草会の会報「北方山草」第19号に吉野博吉氏が「プリムラ類の葉形の変異について」を発表している。北海道及び本州のサクラソウ類の葉のモノクロコピーを羅列した報告であるが、ウリュウコザクラやシャリコザクラ、道央のユキワリソウとされるものなどの葉も出ている。

平成15年（2003年）、ツムラの発行する「植物研究雑誌」78号に「ユキワリソウ（サクラソウ科）の種内変異」という論文が山崎敬博士によって発表された。
Primula farinosa L. subsp. modesta (Bisset & Moore) Pax var. modesta　ユキワリソウ
var. matsumurae (Petitm.) Yamazaki　レブンコザクラ
var. samanimontana Tatew.　サマニユキワリ
var. fauriei (Franch.) Miyabe　ユキワリコザクラ
山崎博士はこの論文で韓国産の２変種も含めて全６変種で亜種 modesta とし、10年前の『Flora of Japan』で展開した種 modesta 説を変更した。
論文の最初に次のように述べている。「広義のユキワリソウ Primula farinosa L. subsp. modesta (Bisset & Moore) Paxは千島、北海道、本州、四国、朝鮮南部に分布する。母種の subsp. farinosaとは萼が深く裂け、裂片の先が尖ることで区別され、別の種類として扱われることもあるが質的に異なる性質とは見られないので同一種内の変異と見なすのが妥当と思われる。広義のユキワリソウは地域ごとに葉の形に変異があり、幾つかの変種に分けられているので、それらを整理してみる。
狭義のユキワリソウ var. modesta は 関東地方、中部地方、四国に分布し、葉は大きく、へら形で、先は鈍いが先端がやや尖り、尖るかやや尖った不揃いの鋸歯があるのが特徴で、葉身は下方へ次第に狭くなり葉柄に流れ葉柄はあまり明瞭ではない。東北地方から北海道北東部、千島にはユキワリコザクラ var. fauriei (Franch.) Miyabe が分布する。これは葉が広卵形で、基部は広楔形か切形で、葉身は短く葉柄に流れるが短く、明瞭な葉柄を持つ。北海道中部から礼文島、利尻島にかけてレブンコザクラ var.

matsumurae (Petitm.) Yamazaki が分布する。この葉身の基部は著しく葉身に流れて全体はへら形となり、ユキワリソウの葉に似ている。しかし、葉の鋸歯がほとんど目立たず、先端があまり尖らないのでユキワリソウと区別できる。しかし、葉に鋸歯のあるものもあり、区別の難しいものもあるが、両者の間にユキワリコザクラが分布するので混同されることはない。北海道の様似、幌泉地域にはサマニユキワリ var. samanimontana Tatew. が分布する。これは葉が長楕円形または長楕円状披針形で鋸歯が目立たず、縁が下側に捲れる傾向があり、葉身は葉柄に流れるが明瞭な柄がある。以上のように、日本には地域的に異なる４変種が認められる。」

上記のように、この論文では北海道にユキワリソウは認められず、３変種が存在するとされた。なお、本州の標本のうち下北半島の一標本についてはレブンコザクラとされた。

インターネットに「青森県植物図譜」が公開されている（2009年更新）。岩淵功氏の見事な植物画に神真波氏が簡略な解説を添えている。その中にユキワリコザクラが載っているが、さらに加えて、青森県在住で2009年度の植物地理・分類学会賞を受賞されている元国立林業試験場職員の細井幸兵衛氏が詳しい解説を載せている。

それによれば、山崎博士の青森県産レブンコザクラに対して、「私は改めて（中略）標本で比較したが、下北のものは礼文島産と異なり、かえって群馬県谷川岳のユキワリソウの葉に似ていることが分かった。しかしこれが但し書きの「葉に鋸歯のあるものもあり、区別の難しいもの」なのかは、どうしても合点が行かなかった。そこで県内の他産地の標本が見つかってそれでレブンコザクラと認定できる群落が見つかるまで下北半島の群落は今まで通りユキワリソウとして置くのが良いと判断した。下北では林の中の日陰か日当たりが悪い岩場に着生していて小型で葉の裏が白色なものが多いが、礼文島では日当たりの草地に生えていて大型で葉の裏は黄色である。県外の標本点数は少ないが明らかに下北産は谷川岳産に似ていてレブンコザクラとは異なると判定したい。」

平成15年（2003年）、Timber Press から Newcastle upon Tyne大学のJohn Richards教授によって『Primula』の改訂版が出版された。北海道関係のユキワリソウ類は以下のようになっている。

Primula modesta Bisset et Moore
　var. fauriae (Franchet) Takeda
　var. matsumurae (Petitm.) Takeda
Primula yuparensis Takeda

ソラチコザクラ Primula sorachiana Miyabe et Tatewaki は Primula yuparensisのシノニムとして扱われている。

平成19年（2007年）、誠文堂新光社から『世界のプリムラ』（世界のプリムラ編集委員会編）が出版された。愛媛大学の山口聰准教授が「日本産のサクラソウ属」を６頁にわたって執筆されている（1975年に「ガーデンライフ」14巻４号に発表された堀田満・山口聰「日本産のサクラソウ属」とほぼ同内容）。

平成19年（2007年）、日本育種学会の発行する「Breeding Science」Volume57 issue2 に千葉大学の林麻衣さんが愛知教育大学の加藤淳太郎准教授や千葉大学の三位正洋教授らと共著で発表した「Inter-sectional Hybrids with Various Ploidy Levels between Primula denticulata and Three Varieties of P. modesta」はP. denticulaとP. modesta３変種（P. modesta var. fauriei、P. modesta var. samanimontana、P. modesta var. matsumurae）の間の雑種作成による育種の研究発表であるが、その中に P. modesta var. matsumurae の染色体数が2n=4x=36 であることが書かれている。

平成24年（2012年）、筑波大学大学院の吉田康子氏が「利尻研究」31号に「絶滅危惧植物レブンコザクラの利尻島における保全単位の決定」という論文を寄稿した。この論文にもレブンコザクラが４倍体であることがはっきりと書かれている。原信彦氏の「日本産サクラソウ属 ユキワリソウ節植物の分類学的再検討」には「日本産サクラソウ属ユキワリソウ節の染色体数」という表も載せておられるが、P. modesta var. matsumurae の染色体数は2n=18となっており、この大元の発表は1974年「Cromosome Infomation Service」No. 16に掲載された山口聰氏の「A list of chromosome numbers of Japanese Primula species」となっているが、この論文は入手出来なかった。

レブンコザクラが４倍体であるとすると、今まで様々な図鑑や『Flora of Japan』にも書かれていた、P. modestaと P. sorachianaが２倍体、P. yuparensisと P. macrocarpaは４倍体という図式は崩れ、レブンコザクラが P. modestaの変種という扱いも変更を迫られるのではなかろうか。

話は前後するが、平成23年（2011年）、北方山草会の会報「北方山草」28号（この号はサクラソウ類を小特集）にユキワリソウ類についての興味深い記事が載った。雨竜町在住の佐々木純一さんの「オオサクラソウと幻のウリュウコザクラ」というレポート。2007年に自宅2階からも見えるという奥深い山の大岩壁にウリュウコザクラと通称されるサクラソウが自生することを知って、2010年仲間と共に探索に出かけたが、背丈を超すチシマザサに行く手を阻まれて敗退したというお話。

そして、平成28年（2016年）、「北方山草」33号に続報が載った。

佐々木純一さんの「幻の名花 ウリュウコザクラとの出会い」と、美唄市在住の新田紀敏さんの「やっと出会えたウリュウコザクラ」。12年、13年と偵察を重ね、2015年春、四人のチームが残雪をうまく利用してようやく岩壁に到達、登山技術に熟達した新田氏が困難の末発見し、写真を撮り、標本を採集したという。二つの報告の間に挟まれたカ

ラー頁には、苦労して撮られた岩壁中の自生の写真、押し葉標本と葉の大写しの写真が載せられている。
　標本は、北大総合博物館に収められ、分類学的帰属が調べられる予定だという。

　インターネット上にYListというのがあり、以下そのサイトより引用する。「「植物和名ー学名インデックス YList」（略称：YList）は、「施設に保存されている研究用植物のデータベース」（BG Plants）で用いられる植物名、特に、日本産植物の和名と学名に関する詳細情報の整備を目的として、2003年に米倉浩司（東北大学）と梶田忠（東京大学〔現・琉球大学〕）を中心に作成されたものです。（中略）基本データ蓄積と入力が主に米倉浩司によって行われたため、通称、YList（"ワイリスト”）と呼ばれていました。（中略）2007年4月に「植物和名ー学名インデックスYList」を正式名称とすることになりました（中略）YList では、北海道から沖縄・小笠原までの日本に自生，帰化している全ての維管束植物と主な栽培植物について，和名(標準和名と異名を米倉の判断で決定しています)，学名(正名と主な異名およびその出典)、その学名が引用されている日本の主要植物誌（「日本の野生植物」 (1982-2003)；「原色日本植物図鑑」 (1957-1979)；「新日本植物誌」(1983)；「Flora of Japan」(1993-)）の頁番号、所属する科名(新Engler, Cronquist，APGII)とそのコード番号がリストアップされています。」
　Primula farinosa L. subsp. modesta (Bisset et S. Moore) Pax var. modesta (Bisset et S.Moore) Makino ex T.Yamaz.　ユキワリソウ
　　var. fauriei (Franch.) Miyabe　ユキワリコザクラ
　　var. samanimontana (Tatew.) T.Yamaz.　サマニユキワリ
　　var. matsumurae (Petitm.) T.Yamaz.　レブンコザクラ
　Primula sorachiana Miyabe et Tatew.　ソラチコザクラ
　Primula yuparensis Takeda　ユウバリコザクラ（別名 ユウパリコザクラ）
　平成25年（2012年）、東北大学の米倉浩司助教は北隆館から『日本維管束植物目録』（監修：東京大学邑田仁教授）を出版した。これはYListを元にしたもので、ユキワリソウ類については上記の学名と全く変わるところはない。

　北海道の植物写真家の第一人者、梅沢俊氏は40年以上にわたって、道内外の植物図鑑の写真を提供し、また関連する種々の本を出版してきたが、単独で植物図鑑を出したのは昭和61年（1986年）、北海道新聞社から出した『野外見分け図鑑　北海道の高山植物』が最初。１ページに２種ずつと写真を大きく使ったハンディな図鑑で、野外で見分けるにはとても便利で私もずいぶんお世話になったけれど、解説が簡単で、花の色別で分類されており、見分け力がついてくると少しもの足りなくなった。
　そして平成21年（2009年）、23年ぶりに同じ北海道新聞社から『[新版]北海道の高山植物』が出版された。この図鑑の売りは表紙に印刷された文言にある通りであるが、特に科別の配列、詳しくてかつわかりやすい解説、見事な写真の数々。山に持っ

ていっても、書斎でのんびり眺めても、一冊で二度楽しめるすばらしい図鑑である。（もう出版後９年もたっているとは。時の経つのは早い。）

Primula farinosa ssp. modesta　ユキワリソウ
　var. fauriei　ユキワリコザクラ
　var. matsumurae　レブンコザクラ
Primula sorachiana　ソラチコザクラ
Primula　yuparensis　ユウパリコザクラ（ユウバリコザクラ）

北海道にユキワリソウがあるのかどうか断定していない。２枚の写真を挙げて、それに「ユキワリソウの型」と微妙なキャプションを付けるにとどめている。

平成27年（2015年）、北海道大学総合博物館教授の高橋英樹博士は千島列島に生育する植物1300種類以上をまとめ、総合的な解説を加えた大著『千島列島の植物』を上梓した。その中に、ユキワリソウ類が２種類掲げられている。

Primula modesta Bisset et S. Moore var. fauriei (Franch.) Takeda　ユキワリコザクラ

Primula modesta Bisset et S. Moore var. matsumurae (Petitm.) Takeda　レブンコザクラ

レブンコザクラの解説中に以下のことが書かれている。「レブンコザクラは道東知床半島にも産し、これの延長とみられる。なお P. modestaを P. farinosaから区別するのに萼裂片の特徴が使われる（Yamazaki, 1993b）が、カムチャッカ半島産の P. farinosaを見ると裂片がとがり、深めに切れ込む個体もあり、P. modestaから明瞭に分けるのは難しいと思う。しかし、一方で米倉（2012）に従うと亜種・変種を含む長い学名（4名）になってしまい２名法の長所が失われてしまう。P. farinosa—modesta 群全体の分類が確定するまで、ここでは暫定的に P. modestaを生かしておく。」

同じ2015年の暮れから約３年かけて、平凡社から『改訂新版　日本の野生植物』全５巻+総索引セットが発売された。旧「日本の野生植物」全３巻から約30年ぶりの改訂で、『日本の野生植物―木本』全２巻も合一し、被子植物の新しい系統分類体系APG Ⅲ・Ⅳを採用し、写真も一新された。サクラソウ科は2017年に発売された第４巻に収録されていて、執筆は北海道大学の高橋英樹教授が担当した。

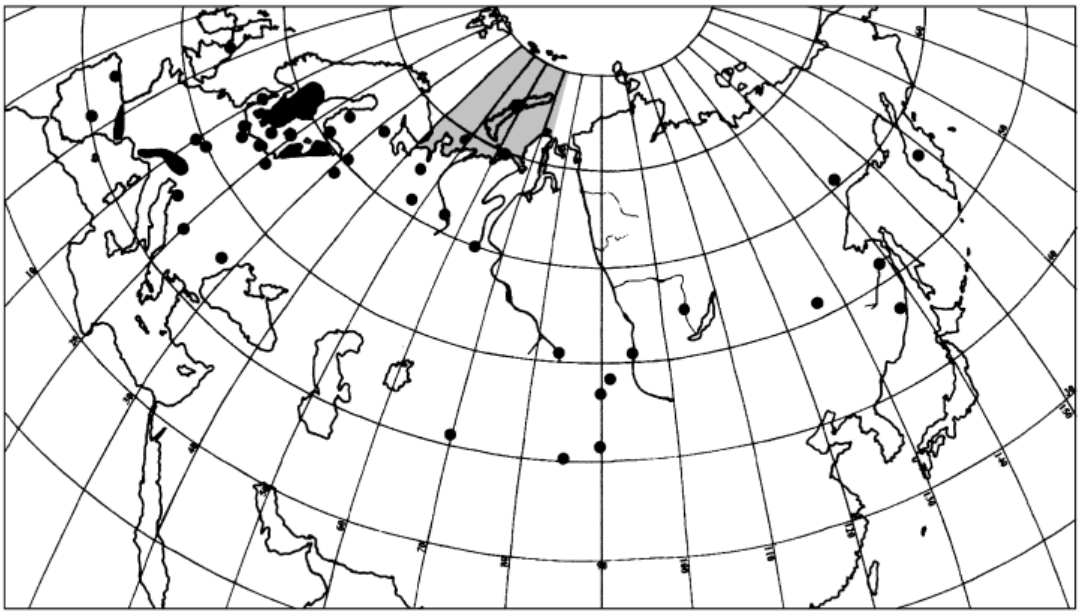
Primula modesta Bisset et S. Moore var. modesta　ユキワリソウ
　var. fauriei (Franch.) Takeda　ユキワリコザクラ
　var. samanimontana (Tatew.) Nakai　サマニユキワリ
　var. matsumurae (Petitm.) Takeda　レブンコザクラ

Primula yuparensis Takeda　ユウバリコザクラ
Primula sorachiana Miyabe et Tatew.　ソラチコザクラ
検索表及び種の解説文は前著の山崎敬博士のものを元にして若干の修正が加えられた。葉がより楕円形から披針形で縁が強く反り返るものを特にサマニユキワリということがあるが最近は認められていないという一文も新たに付け加えられた。
ユキワリソウの解説文には「本州（関東～近畿地方および東北地方の一部）・四国・九州に分布する。」と書かれているが、写真の頁には本州の至仏山と谷川岳の花の写真と共に北海道峠山の葉の写真も載せられている。

平成29年（2017年）、北隆館から牧野富太郎原著；邑田仁・米倉浩司編集の大型図鑑『新分類 牧野日本植物図鑑』が出版された。北隆館のサイトに以下の説明がある。「被子植物の新分類体系であるAPGシステムをはじめ，植物のあらゆる分類群でDNA解析による系統関係の研究が進められている。本版は，「牧野日本植物図鑑」としては初めて，これら最新の分類を取り入れ分類体系の大改訂を行った。
今改訂では，新しい分類体系による，配列および学名の変更を中心に行い，最近発見された新種や，園芸市場でよく見かける植物など，若干の種類の追加を行った。」
Primula farinosa L.　subsp. modesta (Bisset et S.Moore) Pax　var. modesta (Bisset et S.Moore) Makino　ユキワリソウ
　　var. fauriei (Franch.) Miyabe　ユキワリコザクラ
Primula yuparensis Takeda　ユウバリコザクラ
学名は『日本維管束植物目録』と同じになった。しかしその『日本維管束植物目録』にあるレブンコザクラ、サマニユキワリ、ソラチコザクラの記載は無い。元々牧野図鑑には無いからである。

平成30年（2018年）、北海道新聞社から梅沢俊氏の『北海道の草花』が発刊された。新分類体系APGⅢ,Ⅳに準拠し、学名は原則として『改訂新版　日本の野生植物』に拠っている。前著『新北海道の花』（北海道大学出版会）の学名は「Flora of Japan」に基づいていたので、ユキワリソウ類は P. farinosa ssp. modestaの４変種扱いであったが、今回は P. modestaの４変種となっている。解説文は『新北海道の花』とさほど変わっていないが、写真に峠山のユキワリソウも加えられ、『[新版]北海道の高山植物』（北海道新聞社）と同様にユキワリソウのタイプというキャップションが付けられている。
掲載種数が『新北海道の花』から50種も増え、身近な帰化植物から高山の小低木まで、北海道の花の名前を知るのには最良の図鑑であるが、大きく重い。

Primula farinosa L.　Estoniaにて Peeter Tarlap氏撮影。 GBIFよりpublic domain



「Primula farinosa L.」（2003）D. J. Hambler・J. M. Dixon
https://doi.org/10.1046/j.1365-2745.2003.00797.x より転載。

ソラチコザクラ

参考資料　　（資料名　著者　出版社　出版年　論文名　執筆者　その他の順）

日本の固有植物　加藤雅啓・海老原淳　東海大学出版会　2011
世界のプリムラ　世界のプリムラ編集委員会　誠文堂新光社　2007　プリムラ属植物の分布とその分類　田淵俊人訳
プリムラの発見、紹介、育種小史　椎野昌宏訳
Journal of Ecology 91　2003　Primula farinosa L. D. J. Hambler・J. M. Dixo　pdf
「フィールド写真と私」　梅沢俊　北海道新聞社　1988年

☆「みねはな」25号の入手に関して久志博信氏と森和男氏にたいへんお世話になりました。ここに深くお礼申し上げます。